

吉井源太のふるさと、いの町。仁淀川水系を中心に、紙漉き工房が点在している。典具帖紙や雁皮紙など、薄くてしなやかな紙を得意としてきた産地であるが、現在は多様化し、漉き手ごとに紙が異なる。県内に手漉きの工房は20軒ほどある。昭和30年代には極薄の典具帖紙を抄く機械が伊野で開発され、その前後は機械抄紙への転向も多かった。紙漉き・原料・道具がそろそろ全国的に貴重な手漉き産地だけに、原料と道具の担い手確保が望まれる。



【田村 寛さん】(いの町)

土佐和紙工芸村で1990年代に研修生として学び、独立した。土佐市出身。僧侶でもある。若手職人で「土佐の山・紙資源の会」を結成して原料を栽培、一部を自給。夏場は原料の加工や道具の修理、楮畑の世話、新製品の試験漉き期間。

「お客さんから紙に求められることが、作り方や作り手の生活込みになっています。紙の違いを見てもらうためにも、発信力を高めたいです」



写真現像用の土佐白金紙を開発した田村さん。これは研究中の発酵紙。自然発酵で書のにじみを抑えたいと言う。



工房の前を流れる仁淀川。



地元産の天然ネリ、トロロアオイの根。乾かして保存する。